No.60

1面　第96回二科展
2～10面　総評、受賞者喜びの言葉と制作のねらい
11面　第96回展授賞式、二科会懇親会、巡回展
12面　写真部、デザイン部
13面　ギャラリートーク
14～15面　震災義援展示、訃報
16面　広報だより、事務局だより、編集後記

二科

秋季

社団法人
発行人　織田廣喜　発行所　二科会事務所
電　話　03（3354）6646

（絵）田村孝之介　（絵）藤田嗣治　（絵）東郷青児　（彫）笠置季男　（絵）岡田謙三

第96回二科展

未曾有の東日本大震災に見舞われ、自粛ムードの日々が続き、華々しさを抑えた日常の中、第96回二科展が、平成二十三年八月三十一日から九月十二日まで、六本木国立新美術館において開催されました。

初日からユックリ台風の影響で、天候の悪い日々が続き、会場には入場者が少なかった様に感じましたが、後半は例年どおり、活気ある会場がもどって来ました。

絵画部の方々によって行われた震災義援活動で制作された子供達の作品が、会場を締めくくる壁面に力強く掛かっていたのが、印象的でした。

又、会員の方々にお願いしたチャリティー用色紙、立体作品などで、NHK厚生事業団を通しての震災義援に参加して頂きました。

節電の中、何とか無事過ごせたのは、前年の酷暑に比べれば、いくらか穏やかだったからでしょう。

今回の表紙は22回展、23回展、25回展、28回展、32回展を使用しました。

第96回展
総評
［絵画］

伸展する二科の作品展示

理事　香川　猛

今年の三月に起きた東日本大震災は各地に未曾有の被害をもたらした。

今日まで順調に歩んで来た二科展も今年はこの災害により一時は、開催を危ぶまれる空気が流れた。

いざ、開催の準備が始まると明るいムードで順調にすべり出した。一般応募点数も例年に近い三千点近くに達し、会員・会友を含めると四千点以上となった。

いよいよ展覧会が始まると、大震災の世相を吹飛ばすかのように、会場は入場者が多く、明るく賑やかな空気につつまれた。（十三日間で約九万人の入場者）

展覧会委員会では二科展をより充実したものにするため、作品選考の時点からコンセプトを持つべきだと考えた。審査前の話し合いで、三つの具体案を提出した。

①二点作家を多くし、見応えのある会場を増やす。

②アンダー35・新人奨励賞・新人室等を計画し、若手作家の士気高揚を促す。

③大震災で被災した児童の作品を一階出口附近に展示し、復興援助の真心を伝える。

このコンセプトが会員の同意と協力により慎重審査につながり、作品展示もスムーズにいき、例年になくきれいで、充実した会場を作り上げた。

一階の展示室は会員の作品が中心で、大作が多く、重鎮作家・中堅作家・斬新作家と順路を追って見応えのある作品が陳列された。

二階は会友を中心として冒険的な作品が多く、将来に向けての熱意が感じられた。特に二点作家は昨年までの経験の上に、より充実した質の高い作品となった。

三階は受賞作品を含め、新人室にはユニークな発想と斬新な技法を用いた新鮮な作品が多く、将来性の高い作品展示となった。

大震災で被害を受けた福島の児童作品は水彩や貼り絵を使ったグループによる合作で、仲間同志の協力と絆の大切さを感じさせる。一階出口の壁面に展示されたのは印象的であった。

総じて、今回の二科展では作品展示に著しい伸展が感じられた。

絵画部審査風景

テープカット

第96回二科展受賞者氏名（絵画部）

内閣総理大臣賞（絵画）
中原史雄（京都）

二科賞
餅原宣久（鹿児島）

パリ賞
北村美佳（滋賀）

損保ジャパン美術財団奨励賞
竹淵直美（埼玉）

上野の森美術館奨励賞
山口博司（長崎）

会員賞
阿部正明（新潟）
髙藤博行（広島）
友政光雄（滋賀）
深見まさ子（神奈川）

会友賞
内田詠子（愛知）
織田清子（福島）
佐藤英行（神奈川）
篠原征子（福岡）
須田美紀子（福島）
瀬野道子（京都）
ナカムラ延（千葉）
長谷川昭三（兵庫）
町田初恵（茨城）
水野興三（愛知）
山下かじん（長崎）

特選
朝倉由美（静岡）
石丸節子（千葉）
岩田一男（山口）
宇都木裕子（滋賀）
大堀幸子（神奈川）
岡本礼子（広島）
音辻尊徳（長崎）
金子久子（愛知）
鈴木郁代（岐阜）
高谷ひろ子（神奈川）
鳥谷啓子（兵庫）
中野忠士（熊本）
新川久子（岐阜）
堀谷莉恵（熊本）
山下泰弘（千葉）
山田美代子（北海道）

新人奨励賞
髙見愛（熊本）
津田佐千子（石川）
中村紘子（東京）
西夏希（熊本）
吉井誠愛（長崎）（大阪）

会員推挙
石関和夫（群馬）
伊藤榮一（新潟）
上村育子（宮崎）
中川功（滋賀）
吉田清光（神奈川）

会友推挙
池原多恵子（富山）
磯貝文利（愛知）
今泉あかね（神奈川）
浦上光喜（熊本）
太田広信（富山）
片岡素子（東京）
工藤絵里子（埼玉）
栗原清道（愛媛）
小林直司（新潟）
佐野武夫（愛知）
渋谷良子（千葉）
すぎもと和（愛知）
竹淵直美（埼玉）
田辺幸子（新潟）
遠山由美（大阪）
永井勝（東京）
中村正江（岐阜）
西眞紀子（石川）
根木悟（京都）
服部幸雄（群馬）
古谷和子（神奈川）
森千恵（愛知）
安本弘恵（愛知）

会員になって
―自己紹介―

石関 和夫
（絵画）

初出品以来、「人」を描き続けてきました。近年は「前向きに生きること」を主題とし、困難に遭っても希望を見出していこうとする人の姿を描いています。

目標としてきた会員に推挙していただきましたが、これを通過点ととらえ、今後も挑戦する姿勢をもち続けたいと思っています。特に、画面構成や画肌づくりを大切にして思いを効果的に表現できるよう努力していきたいと考えています。

伊藤 榮一
（絵画）

43回展に初入選以来毎年好んでシュール風の作品を出品してきました。

シュールの作品は数少なく、遠回りしている感もありました。しかし、二科会趣旨の文面の一部に、一流一派式にならない、流派の如何を問わずに共感し、今日に至りました。

これからの制作は、なおシュール系を模索し、より研鑽を重ね、期待に応えるよう、作品を描き続けていきます。

上村 育子
（絵画）

学生生活を含め、四十年間の大阪での暮らしから離れて今年の四月に、宮崎県の方に帰郷しました。

記憶の断片を誇張と省略を意識しながら画面構成をしていますが、その奥に潜む「向こう側」が表現出来ればと模索を繰り返しております。この度会員に推挙していただいた事を励みに今までとは異なる環境の中で自分自身を問う良い機会にしていきたいと思います。

中川 功
（絵画）

「先づは自分を表現すること、そして逞しく生きなさい。」生前、横溝環先生の病床からの便りの一節で、私には今も忘れられない制作上の心情となっています。国家公務員を定年退官し「これからが我が人生」との思いで本格的な制作活動に入って早や十三年が過ぎました。

「自分を表現する」……。会員になってなお、追求し続ける奥深いテーマです。

吉田 清光
（絵画）

今年で四十三回目の出品で会員に推挙されました。二科の作家達にあこがれて二十才の初入選の時は分解した百号を電車で運び都美館の搬入口で木枠を組立てキャンバスを張り直して出品した事などが思い出されます。今はあのあこがれていた作家の作品は無く悲しいかぎりですが、あこがれていた作家達にまけない様な作品を描きたいと思うばかりです。

受賞者 喜びの言葉

二科賞
餅原 宣久

受賞の連絡をいただき、ただ驚くばかりでそのまま暫く過ごしました。まだこの「できごと」を自覚するに留まっている現状ですが、少し落ち着きその意味や重さを感じ始めています。

継続してきた制作に対し、たいへん大きな評価をいただいたことは、この上ない喜びであり、大きな励みになります。

パリ賞
北村 美佳

初出品の頃から夢みていたパリ賞。叶わぬ夢と思っていましたので、本当に驚きました。少し時間が経って今思いますことは、一緒に出品してきた仲間と、そして、これまであたたかく見守って下さった先生方への感謝の気持ちです。描くことは孤独ですが、受賞にあたっていただいた、たくさんの方からのお言葉は、これからの私の大きな支えです。本当にありがとうございました。

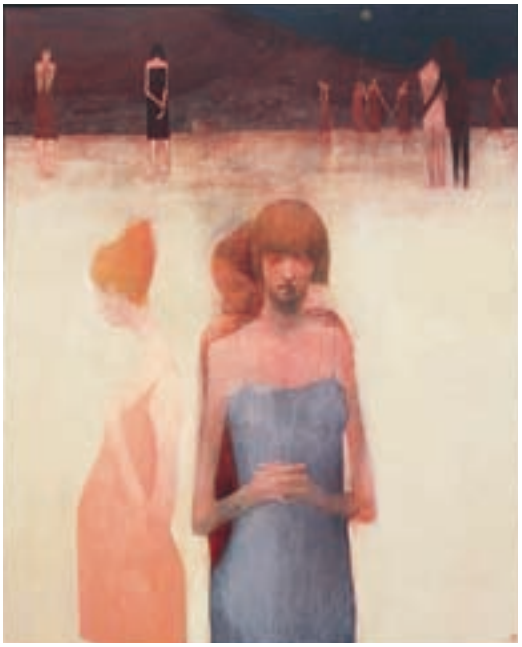
―制作のねらいなど―

時感　11-Ⅺ
餅原 宣久（鹿児島）

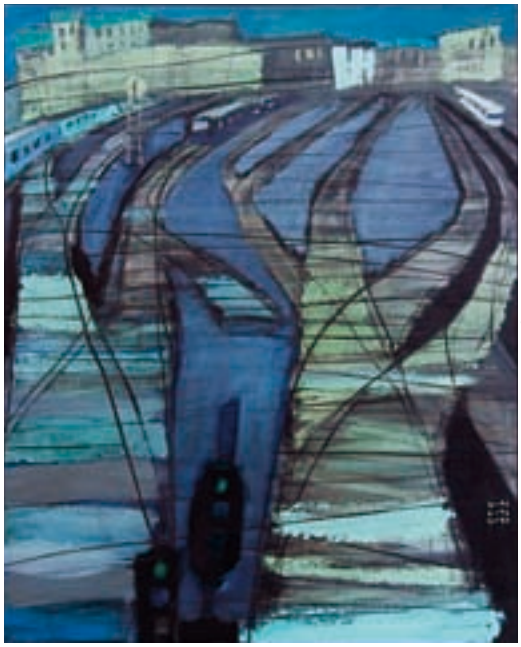
タイトルの「時を感じる」と書く「時感」という造語は私の作品の内容と制作姿勢について語る重要なキーワードです。作品を通して「生きている」という「感覚」、つまり「時感」を思い起こさせるような平面の制作を目指し、油彩の技法において何層も何層も塗り重ねて表出する平面を作り上げていく作業は自分が感じている「時」を織り込んでいくことだと考えています。

RAIL WAY Ⅰ
北村 美佳（滋賀）

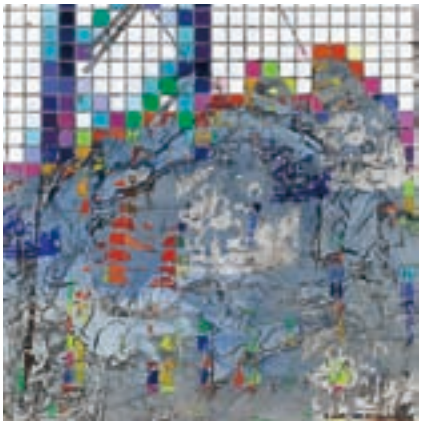
色々なことが起こった今年は、何を描けばいいのかもわからなくなり、アトリエで仕事が進まず、スケッチブックを持って、電車に乗りました。京都駅で降りて、強い風に飛ばされそうになりながら、しばらく線路をスケッチしました。と、いうか、ひたすら線を引きました。次々と電車が行き交い、流れてゆく時を眺めていると、頭がからっぽになりました。そして描いたのが今回の作品です。



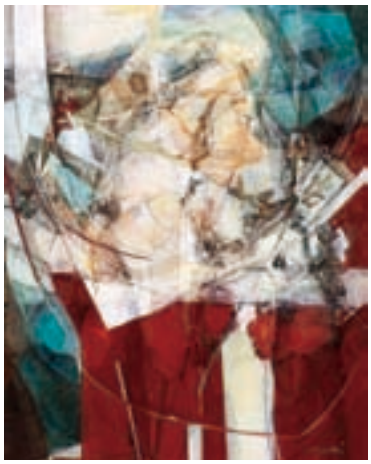
二科賞　時感　11-Ⅺ　100F　餅原 宣久



パリ賞　RAIL WAY Ⅰ　100F　北村 美佳



上野の森美術館 奨励賞
リフレインXⅢ　80S
山口 博司



特選　'11 生きるⅤ　100F
朝倉 由美

損保ジャパン美術財団 奨励賞
二元論　100F
竹淵 直美

特選　道Ａ　100F
山田 美代子

特選　月の雫Ⅳ　100F
岩田 一男

特選　組曲　80S
石丸 節子

二元論　竹淵 直美（埼玉）

去年のみならず今年も賞をいただき、大変嬉しく思っております。今回の絵は二元論という論理を私なりに形にして表現してみました。これからもますます精進していきます。ありがとうございました。

'11生きるⅤ　朝倉 由美（静岡）

油絵を描いて四十年。お世話になった多くの方々のお陰で、やっとスタート地点にたどりつけた気持ちです。

初入選以後「生きる」をテーマに描いて八年連続入選する事ができました。三月の東日本大震災は、山形県出身の私にとって衝撃的な出来事で「明るく勇気づけられる作品にしたい」思いで表現しました。

リフレインXⅢ　山口 博司（長崎）

受賞の知らせを受けた後は実感がなく、次の日の朝が一番嬉しかったです。

手を動かしながらでなければひらめきが訪れないと信じ、今年は小品二千六百枚を制作するなど、もがきました。結果、たれる、はねる、割れるなど塗料のもつ表情を受け入れ、自分なりにコントロールできた作品を認めていただき、大変光栄です。

組曲　石丸 節子（千葉）

国立新美術館の開幕に初出品をし四回目となります。昨年は体調を崩し半ば描くことを諦めかけて居りましたが、本年より座ることにも慣れ描き終えてみればこんなに素晴らしい賞を賜りました。数年前より色や形にこだわり、音の響きをとおし自分の世界を描いてきましたが、これからもさらに継続して取り組んで参りたいと思います。

月の雫Ⅳ　岩田 一男（山口）

私は運勢的に火が強過ぎるとの事で、今水をテーマにした作品を描いています。月の雫とは、露の事で、私の絵には水滴が、数多く登場します。

生命は、水から生まれ、育くまれる。ひいては、美の化身であるビーナスは、月の雫から誕生するといった思いが、私の絵には込められています。

道Ａ　山田 美代子（北海道）

私がこれまで歩んで来た道をふり返ると必ず絵が身近にあり、心の糧になっていたような気がします。

それでも絵を続けようか迷う時があります。

その時の心情を、道をテーマに表現してみました。

これからも多くの方々に支えられていた事に感謝しゆっくりと絵の道を歩いて行きたいと思います。

特選　象Ⅱ　100F
大堀 幸子

特選
甘月蝕：天と地と、
そして狭間のブルー・Ⅱ　100F
音辻 尊徳

特選　夜明けの町を行く　100F
宇都木 裕子

特選　朽ちていく花Ⅲ　100F
金子 久子

特選　ゆれるバラ－レクイエム　100F
岡本 礼子

特選　la vie　100F
高谷 ひろ子

夜明けの町を行く
宇都木 裕子（滋賀）

キャンバスにいくつかの線を引き、そこから人物や建物・風景を探し出して作った架空の世界を描いています。何かにつけて臆病な私ですが、特選をいただいたことで新しい事に挑戦する勇気もいただきました。静かだけれど「何か起こりそうな予感」が感じられる、そんな絵を描くため、今後も精一杯努力いたします。

甘月蝕：天と地と、そして狭間のブルー・Ⅱ
音辻 尊徳（長崎）

この作品は、いつの間にか忘れてしまっている偉大なる自然への畏怖の念と敬意を、私達が作り出した脅威のシンボルと、翻弄される女性の姿を描くことで、我々自身への警鐘を促す意味を込めて、メッセージとして具現化しました。

古より、自然から多くの恩恵を受けてきた民族として復興を願うばかりです。

象Ⅱ
大堀 幸子（神奈川）

初出品で特選を頂きよもやと言う思いで大変びっくり致しましたが、今回の作品は今迄何処かで見たことのある風景を懐かしく感じとって頂ければと思っています。描いていく内に古さの中に新しさを少し取り入れてみました。人の住む街、生きている街として観て頂く方に想いを馳せて頂ければ幸いです。

la vie
高谷 ひろ子（神奈川）

人生、生き方という意味の la vie（ラヴィ）は私自身へ問いかけるタイトル。

ふと振りかえると、よろよろしたり、立ちすくんだり、曲がりくねった線の上に立っている自分。絵も同じ、迷いながら描いている。

混迷する二〇一一年に頂いた特選は、喜びよりも大きな課題を与えられたと受けとめています。

ゆれるバラ－レクイエム
岡本 礼子（広島）

「あなたは、リズムに反応している。」「自分を信じて描きなさい。」私が大事にしている言葉です。形に囚われず、自分の感覚感動を大切にするようになりました。絵が自由になり、リズムを感じるモノや形に手の動くまま任せて描くようになりました。今、「アートで子育て、アートで町づくり」を目指しています。

朽ちていく花Ⅲ
金子 久子（愛知）

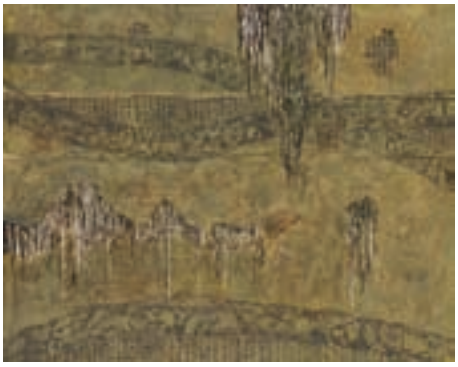
十月、立ち枯れた向日葵に心を奪われます。ものにはすべて終わりがあることの、悲しさ、空しさを想い描きました。実物は、暗く重い色ですが、流れゆく季節の中で消えてゆくイメージにしたいと考えました。

今回の受賞が、これからの制作にはずみをつけてくれると思います。ありがとうございました。

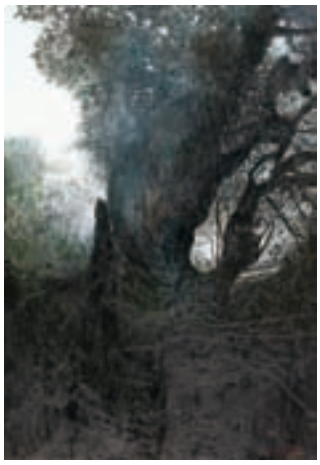
特選　necoⅢ　80F
堀谷 莉恵

特選　思い出のケアンズ　100F
鈴木 郁代

特選　還る物Ⅰ　100F
鳥谷 啓子



特選　壁（ミスチーフ）　100F
新川 久子



特選
樹生（夕闇）－2011－P100　100P
山下 泰弘

特選　ハイビーマン２　100F
中野 忠士

還る物Ⅰ
鳥谷 啓子（兵庫）

地面に釘や蝋石で蟻の家を描いていた幼い頃。デザインの勉強をしていた青春時代。そして何かを乗り越えたくて始めた絵画。幸いにも発表の場を与えて頂く。大地から得た物が人との関わり、年月を経てまた大地へ還ってゆく事に思いを寄せつつ「特選」を前に気を引締めて今日も「錆びた面白いカタチ」を暗中模索。

思い出のケアンズ
鈴木 郁代（岐阜）

二十五年目にて特選を頂き嬉しくて次のステップになれるよう頑張ります。ケアンズを飛び立つ時、空の上より幾何学的風景に感動し頭の中で構図を取りました。私は同じテーマを何年も追究出来なくて悩んでいますが、いつも感動した物を描きたいと思っています。

necoⅢ
堀谷 莉恵（熊本）

身に余る賞をいただいたのは信じられない思いですが、他の受賞者の方々の作品を見るとまだまだ未熟だと痛感いたします。

時に悪、時に善と気まぐれに動く猫をまだ描ききれずにいますが、物と戯れ人の入り込めない猫だけの世界を感じていただければ幸いです。

ハイビーマン２
中野 忠士（熊本）

空行く雲にも、野を吹き渡る風にも、動かぬ岩にも時として、父母を、恋人を思い出させる一瞬がある。

廃棄する古ビニールの中にも、見ようによっては様々な物体の顔に見えて何かを語りかけているような気さえする、その場面をとらえた。構成色彩と課題多いと思いますが一歩ずつでも前進出来ればと思います。

樹生（夕闇）－2011－P100
山下 泰弘（千葉）

絵の制作は人生そのもの毎日の生活の一部になっています。また、毎日が充実しています。今回の作品は夕方、日が暮れる風景を屋久島で体験しました。微妙に日が落ちて行くトーン、釣瓶落しが大変に幻想的で美しく敬意を感じました。来年も今年以上に良い作品が生み出せる様に努力をして邁進して行きたいです。

壁（ミスチーフ）
新川 久子（大阪）

特選の電報に驚き、一番は誰に報告しようかと家の中を歩き廻りました。さて、受賞作「壁」は私の実家の土壁です。昔は親類が集まり、ワラを切り、土と水を混ぜて捏ね塗ったものでした。今では一部欠落したりシミも付いていますが、温もりを感じます。昨年他界した父との思い出を感謝をこめて描きました。

新人奨励賞　時の薫り-Ⅱ　100F
津田 佐千子

新人奨励賞　爺の大鋸　100F
髙見 愛

新人奨励賞　樹Ⅲ　80F
西 夏希

新人奨励賞　小鳥に語る　100F
西本 誠

新人奨励賞　LOVE & PEACE　100F
中村 紘子

新人奨励賞　○15　60S
吉井 愛

樹Ⅲ

西 夏希（熊本）

この度は、新人奨励賞という過分な賞をいただきありがとうございます。

私は中学生の時から先生に師事して学び、現在大学でも洋画を専攻しています。

自分の何倍も生きている大木の湛える気配に強く心ひかれて「樹Ⅲ」を製作しました。これからも、もっと表現の幅を広げていきたいと思います。

爺の大鋸

髙見 愛（熊本）

人とどんな生活をしてきたのだろうと古い物を見ては思い巡らせていると、自分はあらゆるものと繋がっていることを気付かせてくれます。先人たちの智慧に学び、自然を尊び、自分を取り巻く環境や人、物を大切にしていきたい。

日々失われていく昔のくらしを少しでも絵に描き残したいと思っています。

時の薫り-Ⅱ

津田 佐千子（石川）

受賞は喜びと共に迷いや不安に臆する事なく描き進む勇気を与えて頂きました。作品は凍てつく冬を、母胎に守られ寒さに耐える小さな命達が誕生を迎える季節を背景に、雪国で自分も成長し共生した自然を、雪融けの質感を交えて表現を試みました。新鮮と思える感覚を失わず、作品を成長させる努力を続けたいです。

○15

吉井 愛（大阪）

食事は生きる為の前向きな行為であり、身心に変化を齎す危険な行為です。

大腸菌、産地偽装、セシウム、カロリー、脂肪、太るかもしれない…。不安は尽きません。可愛いケーキを食べ過ぎ、可愛い服が似合わなくなる恐れもあります。

それでも私は幸福と不幸を美味しく食べて生きます。

LOVE &PEACE

中村 紘子（東京）

受賞の通知を見た時、初めての大作、出品だったので嬉しく、涙がでた。

毎日の様に流れる悲しいニュース、目を覆いたくなるような映像。悲しみに打ちひしがれて自ら命を絶つ人。私になにかできる事はないか考えた。一枚の絵ではなにも変わらないかもしれない。だけど私なりに表現した愛と平和です。

小鳥に語る

西本 誠（長崎）

題名の「小鳥に語る」ですが、同名のリストの曲より頂きました。世界のありようを小鳥に語る様を壁画風に表現しようと試みました。今回は題名を頂いただけで、曲と絵に関係性はございませんが、いつかは曲のキラキラした叙情的な雰囲気を、絵に表現できればと思います。そして、ただただ感謝するばかりです。

第96回展
総評
［彫刻］

第96回二科展に思う

常務理事　菅原 二郎

今年は三月に東北大震災、津波が、そして福島原発の事故が起こり多くの方々が犠牲になられ、今も沢山の方々が避難生活を余儀なくされているという大変な年になった。二科に出品されている方々も被害にあっておられると伺い、皆様が一日も早く復興されることを心より祈っています。

今年の夏もまるで日本が亜熱帯になってしまったような暑さ、そしてスコールを思わせるようなゲリラ豪雨、その上強烈な台風の被害。そのような中、多くの労作、力作が二科展に集まり、搬入、審査、陳列そして八月三十一日からの二科展が始まった。

陳列計画にあたり、まず今年の陳列基本方針を展示委員で協議し、出来るだけ各作家が今までと同じ場所にならないよう、つまり定位置を作らないよう計画した。各部屋に一般、会友、会員の受賞作を始め、力作を中心に構成していけないか頭を悩ました。屋外展示においても、今まで野外展示場A、Bに展示することが多かった作家は野外展示場C、Dに展示することが多かった作家と入れ替え、力作を中心に展示した。

昨年の展示では、屋内に木彫作品が多く、屋外には石の作品ばかりという意見もあり、それを踏まえて、屋内にも石の作品を展示するよう努力した。また、木彫作品や鉄の作品の屋外展示については、屋外展示を前提に制作してこられた作品を除き、木彫はその材質上の、鉄は錆びの問題で野外展示は極力避けた。

ここ数年、事前に展示委員会の了承を得れば規定の専有面積を越えた大作も出品可能になっており、今年も数人より申し出があった。それらの作品を観てみると、やはり規定外寸法の申し出をされてこられるだけの力作で、それぞれの空間で存在感を主張していたように思った。

会友の中でも注目すべき作品が多く、着実に次の会員を狙う位置に接近して来ているように思い、非常に頼もしい感じを私はうけた。

彫刻会場風景

第96回二科展 受賞者氏名（彫刻部）

文部科学大臣賞（彫刻）
小林 亮介（長野）

二科賞
該当者なし

ローマ賞
嶋崎 達哉（千葉）

彫刻の森美術館 奨励賞
本多 紀朗（大阪）

会員賞
嶋崎 達哉（千葉）
下山 直紀（静岡）

会友賞
秋山 隆（広島）
戸部 晴朗（埼玉）
渡辺 一宏（東京）

特選
吉野 ヨシ子（千葉）
高坂 静香（山形）
土屋 賢次（群馬）

新人奨励賞
山田 美樹（山形）

会員推挙
該当者なし

会友推挙
森田 博之（埼玉）
林 一平（石川）
藤田 明美（神奈川）

受賞者 喜びの言葉

ローマ賞
嶋崎 達哉

初出展から四半世紀、葛藤や迷いの中で、作風やスタイルも大きく変わってきました。今回、会員賞とローマ賞を同時に受賞させていただき、今、自分が目指しているものに、多くの先輩方にも賛同して頂けたという自信につながりました。今後も、この受賞に甘えることなく、勇気を持って挑戦していきたいと思っています。

―制作のねらいなど―

Donna Sciarpa（ドンナ シャルパ）
嶋崎 達哉（千葉）

木の持つ柔らかな質感を生かして女性の優しさや奥ゆかしさ、凛とした気品を表現したいと思い、シンプルですが具象の女性像に取り組みました。作品に色や線を入れる事は立体としての形の甘さを補う為ではなく、彫りの甘さを露呈する事もあるのだと気付きました。今後は女性の内面と共に、その背景や空気感を出せればと思います。

serendipity
下山 直紀（静岡）

本作品のテーマとなったものは『柱』と上昇する生命体である。昨今の地球全体の異常な胎動は、全ての生命に、厳しいメッセージをつきつけている。我々人類も周りの生物も、一つの『柱』となり支え合い、未来に向けての想像と創造を紡いでいかなければならない。

耐
本多 紀朗（大阪）

この度は、彫刻の森美術館奨励賞という賞を頂き光栄に思っております。塑像作品が減ってきた中、この作品は、胸、腰の塊を足で支え地面に突き刺さり何事からも耐え、力強い男性像を表現し、又、自分自身の感情なども抑え、耐える事から題名を耐としました。

思い出と共に
秋山 隆（広島）

この度は会友賞を戴き有難うございました。今回の作品では「台座」と「彩色」について模索すると共に、経験の蓄積の上にいる自分というものを表現しようと取り組みました。それぞれ難し

会友賞　風の記憶　戸部 晴朗

ローマ賞・会員賞　Donna Sciarpa（ドンナ シャルパ）
嶋崎 達哉

彫刻の森美術館 奨励賞　耐
本多 紀朗

会員賞　serendipity　下山 直紀

会友賞　思い出と共に　秋山 隆

い課題ではありましたが、次に繋がる一歩として良い結果となった様に思います。

風の記憶　　**戸部 晴朗（埼玉）**

何気無い日常
やさしい風に包まれ
ふと思い出す

心地好い風に吹かれて
私はそこにいた
記憶に残る懐かしい景色

あの時の風を感じながら、断片的に形にしてみた。

世界で最も安全な異性の完成　　**高坂 静香（山形）**

記憶の中の他者と現在の私をテーマに制作しました。また生きている私と死んでいる他者との対比を試みた作品でもあります。試みは様々な点で成功と言えるものではありませんでしたが、少しでも鑑賞者の皆様の記憶に留まる作品であればと願っております。

水面の詩（みなものうた）　　**吉野 ヨシ子（千葉）**

水面から、風、水、葉の音が、囁き合い、雨が降れば一面が、小さな雨粒で、賑やかな笑い声になります。それを見守る勾玉と球体は人々の強い精神力と希望です。自然の中の癒しを、ス

特選　世界で最も安全な異性の完成　高坂 静香

会友賞　Messenger　渡辺 一宏

特選　IN-OUT　土屋 賢次

特選　水面の詩（みなものうた）　吉野 ヨシ子

新人奨励賞　意識　山田 美樹

テンレスという無機質な材料で、未熟ですが、感性を大切に表現してみました。

IN-OUT

土屋 賢次（群馬）

「ルール違反では？」と言う御質問が会場でありました。？　脆弱なフレーム、硬質な欅の直方体、有機的な不明物体が一体に成っていると答えた。老人は「これはいい」と一言。物体をどの様に展示すればの表現。区画内には空気。現実の曖昧さ。題IN-OUT

Messenger

渡辺 一宏（東京）

自分の作品については、各々観た人個々人の内で自由に感じて頂ければ、それ以上のものは余り必要とは考えておりません。それより公募展に於ける賞と言うものの意味を改めて考える契機として、今回の機会を捉えたいと思っております。

意識

山田 美樹（山形）

ある事象に対する意識の違いでそのものの見え方は変わってくる。それでもそこには変わらない本質というものが存在していると私は思う。そのものの本質を掴みたい、と願いながら作品を制作しました。

第96回二科展 授賞式

本年度の二科展授賞式は、八月三十一日、国立新美術館講堂に於いて織田理事長はじめ、損保ジャパン美術財団・原口秀夫様、上野の森美術館・釼持邦弘様、彫刻の森美術館・水野泰山様にご列席を頂き、評論家・林紀一郎様にご祝辞を賜り厳粛に賞状授与が執り行われました。

今年の受賞者の中には東日本大震災の被災地からの受賞者もおり、賞状授与に合わせて受賞作品が正面の大スクリーンに映し出されると、列席者からひときわ温かい拍手が湧きました。

また本年は二十二歳でダブル受賞の会友推挙者が誕生し、力のある若い作家を育てていこうとする空気を感じる授賞式でもありました。受賞者名簿も年々充実した形となり、一つの良い形が出来てきたように思います。

二科展開催の初日に授賞式を行うようになって五年目になりますが、華やかなセレモニーの裏では、二科展成功の為にと動いてくれる多くの人達がいます。そういう方々に感謝をしながら、来年も心に残る授賞式が執り行われるよう更なる努力を積み重ねていく所存です。

事務局　塙　珠世

第96回二科展 懇親会

八月三十一日リッツカールトンホテルで恒例の懇親会が開催されました。

生方理事の司会で、織田理事長から「絵は難しいものです。」に始まるご挨拶があり、ご来賓のNHK厚生文化事業団理事長の中村季恵様、評論家の林 紀一郎様から祝辞をいただきました。続いて、ご来賓の紹介がされました。

石附常務理事が受賞された若い方達に「いつまでも謙虚な態度で臨んで欲しい」とのお話の後、乾杯の音頭を取られ、歓談に入りました。

受賞者が壇上で紹介され、藤田、五味両会員の進行による色紙抽選会が行われ、和やかで有意義な懇親のひと時の後、小山常務理事の挨拶と一本締めで終宴となりました。

カット　会友　中山 昌美

第96回二科巡回展日程

名古屋展
愛知県美術館
平成二十三年十月四日～十月十六日

大阪展
大阪市立美術館
平成二十三年十一月一日～十一月十三日

富山展
富山市民プラザ
平成二十三年十一月十六日～十一月二十三日

京都展
京都市立美術館
平成二十三年十一月二十六日～十二月四日

広島展
広島県立美術館
平成二十四年一月十日～一月十五日

鹿児島展
歴史資料センター黎明館
平成二十四年三月七日～三月十八日

福岡展
福岡市立美術館
平成二十四年四月二十四日～四月三十日

春季展日程

期間　平成二十四年四月十七日～二十三日
会場　東京都美術館ロビー階第三・四棟

表現力発信の場としての二科展

一般社団法人二科会写真部　事務局長　片岡 順一

レンズの向こう側にひろがるその時代の記録をとらえ、後世に伝える役割も写真家の使命です。

今年は国難というべき日本列島未曾有の自然災害に見舞われましたが、例年どおり第96回二科展＝第59回二科会写真部展を開催することができ、ご支援を頂きました各界の皆様、全国写真愛好家の皆様に心より感謝する次第です。

写真部会員、会友の作品をはじめ、応募者から寄せられた一年間の集大成一八、一〇六点の作品から選出した入賞入選一、〇六九作品を併せた全一、四六六作品は、昨年同様に出品者の在住地域別に展示し、さらに今年は壁面に地域別の標示も施し、多くの来館者から「見やすい」との声が聞こえました。

また期間中の土日には写真部会員が入賞作品を中心に解説するギャラリートークを四日間実施、毎回百名を超える参加者に肝銘を与えた様子がうかがえました。

デジタル全盛の昨今、カメラマンの腕よりもカメラの機能に対する評価が高らかに聞こえてきます。

私たちは「文化の鏡」である写真で個人の感性から感動を結ぶ「発信の場」として二科展を開催し、文化の向上に貢献できることを誇りに思うと同時に、ひとりでも多くの方が芸術に親しみ楽しめる平和な日々を心より願っています。

写真部会場風景

写真部ギャラリートーク

第96回展を終えて。

デザイン部代表　今村 昭秀

大震災の年の二科展デザイン部で何かできないか、何をすればいいのか、何ができるのか、を自問し、私たちにできることは表現によって東日本の被災地への応援、支援することではないか、との思いで特別コーナーである「触れて視る」コーナーに復興にエールを送る応援ポスターとその想いをこめた彫刻部作品を展示しました。この復興にエールを送るポスターの全作品を被災地の自治体、各種団体、教育機関などで広く利用、活用していただけるようにデザイン版権を無償で提供させていただくことにしました。こうしたことを表現による心の救援物資とさせていただけたらと思います。デザイン部では社会的に意義のある企画や公共的なテーマを設けることで、ささやかですが社会貢献とその役割を担っていると自負しています。

今年のテーマは「国際森林年」でした。この「国際森林年」を設定したことで組織のあり方や、公募展の役割のひとつである作家の育成、人を育むことと、豊かな森を創ることが共通することを知りました。森の中では高い木、低い木、下草などが、土の中ではカビやバクテリアなどいろんな生き物が限られた空間でお互いにいがみ合いながらも我慢して能力に応じて精一杯生きていて、この「競争」「我慢」「共生」こそが生物社会の掟だそうです。植林するときも好きな木や役に立つ木だけを植えないでその環境に合う木とそれを支える多種多様な木々を混ぜて植える混植、密植することで「競争」「我慢」「共生」がはたらいて豊かな森になるのだそうです。これは人を作家を育成する役割を担っている公募展のあり方にも同じことがいえ、デザイン部の壁面、空間を豊かな森にしたいと思いつつ、毒も蜜も新しさもある異質のようでいて、同時代性を鋭く突いているデザイン部の作品群はすでに豊かな森になっているのではないか。と思いもしました。

本物を追求する一方で、オリジナルに先行してコピーや複製に触れて、複製文化をたのしむ鑑賞体験ができる多元価値時代の現在だからこそ、オリジナルが展示されている展覧会の魅力がより増してくるのではないか、との思いも強くした96回展でした。

(2011・国際森林年)をテーマとしたポスター

ギャラリートーク　絵画部

初めてギャラリートークをやらせていただいた。

事前に考えたのは、

・作品に表現される作家の世界観

・これはテーマに直結する

・テーマにつながるモチーフの選定とシンボル的意味

・それらを関連づける画面構成

こういったものは制作している作者の内的必然性によるもので、トークする者が読み取るのは大変困難である。困難であるが、今度はトークする側の知的直観力や作品に対する感受性によって、その困難を切り開いていくものであると思う。作者とトーク者側の対話はあくまでも、作者に想いを寄せたものであることが必要であると思われる。

トークによって作品が一層輝きを放つものになると良い。浜田、山岸、江崎、堀尾、二石、横前、今村の各先生の作品が少しでも輝いたものになったことを願っている。

三後 勝弘

――・――・――・――・――

会期中、何度かギャラリートークを担当いたしました。参加してくださる方々の多くが出品者であり、絵をお描きになっている方のように見受けましたので、進行のときは作者の個性、制作の秘密みたいなものを引出したいと思っていました。作者との質疑応答などで楽しいやり取りが出来ればと思っていましたが、お願いしてあった作者は、話す事柄を決めていて、長々と話す人が多く、時間をオーバーすることも多かった。

自分の作品では、反発しあう油性絵具と水性絵具を交互に使っている話や、美術館では作品に触る事はタブーとされていますが、自由に触ってみてくださいと言いましたら、喜ばれ一気に雰囲気がほぐれました。

生方 純一

ギャラリートーク　彫刻部

九月四日（日）、今年で六回目になるギャラリートークが第96回二科展彫刻部会場にて開催されました。菅原二郎理事の挨拶の後、五人の作家によるトークは、作品に対する熱い気持ちと、素直でわかりやすい説明によって、好評に終わりました。

では、当日のギャラリートークのコースに沿って会場の様子を紹介します。はじめに、会友工藤直さんの木彫作品（題名：時の旅人）です。この作品は、色の違った木を使った寄せ木作りの人体作品です。参加者が作品前に集まると、いきなり作品の解体から始まりました。巧みに作られた部分の解体になると、参加者からの感嘆の声があがり、作品のもつ強さがどの様な技にささえられているかを知り、感心していました。

次に文部科学大臣賞を受賞した会員小林亮介さんの作品（題名：実11－3漂流）です。野外に出ると、整然と並べられた果実（御影石）の作品は、あたかも、生命が漂流しているようで、「3・11震災の報道に涙していた」と話す小林さんのトークに参加者は、考え深げに聞いていました。

次に同じく野外の作品で特選を受賞した吉野ヨシ子さんの作品（題名：水面（みなも）の詩（うた））です。風と葉と水面のささやきが聞こえてきそうなステンレスの作品を前に、溶接の難しさや組み立ての苦労話に、参加者は興味を持ち質問をしていました。

次に室内にもどり、今年会友推挙された藤田明美さんの作品（題名：底より）です。大地の底から這い出てきたような人体作品で、流木で作られています。特に藤田さんの率直な作品説明に、参加者は好感をもって興味深く聞いていました。

次に特選を受賞した土屋賢次さんの二作品（題名：IN-OUT　FORM11-8）です。「言葉で説明できない内側の世界を木に託して刻みたい」と語る土屋さんに参加者から率直な質問が寄せられ、作家との交流が出来ました。

最後に会員の大村富彦さんの作品（題名：無形の翼）です。テラコッタ作品（素焼き）の大変さや、割れて偶然できるマチュエールの面白さなど話していただき、参加者は大変興味深く聞いていました。

ギャラリートーク終了時には、参加者から自然に拍手が起こり、有意義な企画であったと確信しました。今回協力していただいた皆様には心より感謝いたします。

廣瀬 友彦

南相馬市における義援活動

二科会として、四月十六日の理事会に於いて東日本大地震・大津波・原子力発電所の事故の被災地に対する義援活動委員会を設置した。

六月に入り、福島県南相馬市教育委員会に被災地児童の心のケア支援の絵画教室開設、及びその作品展示企画について、通知をしたところ、市立上真野小学校校長よりの依頼で、二十七日打合わせを行った。

学校長より被災地と上真野小学校の現在の状況の説明があり、学年主任、各学年担任、教頭先生と話し合い、七月六日（水）三時間、七日（木）二時間、同校体育館にて二年生、三年生、四年生を対象に、水彩紙四六判四枚を、つなぎ合わせた大作を共同制作する事を決めた。

二十八日、㈱画材の森ル・ボアの協力により、クレパス、水彩えのぐ、筆、画用紙等を学校宛に発送する。次いで七月二日（土）、南相馬市教育委員会事務局　参事兼指導主事佐藤昌則氏へ、支援授業内容等、活動の詳細を文書にて通知する、そして世界堂で、水彩紙四六判二十枚、いろ紙その他を購入、学校の要望のあった備品、作品乾燥用の棚を決定、学校宛発送注文した。

参加スタッフ七名の担当学年を決め、指導内容を、二年生は虹をテーマに夢を膨らませる。

三年生は七夕をテーマに希望を表現する。

四年生は国指定重要無形民族文化財―相馬野馬追い―一千有余年の歴史を経て、今なおいきづく伝統の祭が大震災にあい、開催が危惧されて例年三日間の祭りがやっと一日だけ挙行された事に鑑み、テーマを夢追いとし、未来に思いを膨らませる。に決定。

七月六日午前九時、上真野小と現在合同で授業を行っている金房（小高区）鳩原（小高区）両校の六十名の児童と体育館で対面。

入口にはいるなり、子ども達の元気な「おはようございます。」の歓声にも似た声に救われ、絵画教室の成功を感じ、元気をもらった瞬間でした。

各学年に分かれての約三時間の共同制作は、時間が短く感じ、子ども達は、活発に、いきいきと楽しんで制作していた。

二年生は、絵の具やマジックで描き、色紙をはり、三年生は、黒や赤、黄などの色を、はけやローラーで大画面に広げ、手をまっ黒にしながら夜空を表現し歓声を上げた。各自大きな星を切張り、絵の中に希望を託していた。

四年生は、郷土の祭り野馬追を、自分達の夢に変え夢追いとして、描いた絵を切り抜き、またいろ紙を張り合わせコラージュ。舞いおりてくる神旗に色どりを添え、子ども達ならではの勇壮な夢絵巻きを完成させた。

七月の被災地・南相馬市

翌七日は、二時間作品の仕上げをし、お別れの写真撮影を学年ごとにして、校長先生へ、作品乾燥用の棚贈呈目録をさし上げた。

ＮＨＫや新聞社の取材も完成まで二日に渡って続いた。

十一時より仲良し保育所へ、年長組十五名と色遊び、子ども達は、初体験の着彩遊びの仕方に、無我夢中になった。

教育委員会へ、上真野小での絵画教室の報告と、九月の国立新美術館への展示についての話をし、帰りがけは放射能線量検査を受けた。

七月三十日（土）　事務所で共同制作作品三点の手直しチェックをし、彩美堂に展示法と作品の額装を依頼した。

八月三十日　第96回二科展に、被災地児童作品特別展示――がんばる僕たち私たち――として展示。同時に教育長・学校長・二科会のメッセージも掲出した。

児童の作品展示風景・国立新美術館

会期中各報道機関の取り上げはもとより、一般入場者の関心の高さと共に、感銘感動を与え、多大の反響を呼んだ。

名古屋から始まった、巡回展に、二科デザイン部中部統括・岩田明先生制作になる、被災地児童作品のパネルが加えられた。

十月五日　上真野小学校と仲良し保育所へ、作品を返却し、児童達に作品掲載の冊子を一冊ずつ渡した。

大地震から七ヶ月以上経った被災地は、今も放射能に怯えながらの生活が好転する兆しが一向に見えない。除染作業と子どもの甲状腺検査は、はじまったばかりだ。

子どものストレスを軽減させる取り組みを、もっと続けて行くべきではないだろうか……。

川内　悟

南相馬市から

南相馬市市長　桜井勝延
教育長　青木紀男

このたび、本市上真野小学校におきまして、絵画教室を開催いただき、また、子どもたちの作品展示など、ご配慮賜り重ねて厚く御礼申し上げます。このことは、子どもたちへの何よりの励ましになるものと確信するものであります。

今後共、教育行政復旧復興のため、より一層のご理解とご協力を賜りますようお願い申し上げます。

ここに上真野小学校の担任の先生・児童そして保護者より沢山のお便りを頂きましたので、その中からいくつか紹介します。

伏見　裕子（担任）

この度のご厚意、とても感謝しております。

子ども達は本当に喜んでおり、描いた絵のことを一学期の一番の思い出にした子が多くいました。

震災後、子ども達の環境は、まだ厳しいですが笑顔がいっぱいです。その大きな要因の一つが、今回の二科会の皆様の支援でした。今でも自由に自分の思いで描けた事、指導の先生から

ほめていただいた事、国立新美術館に飾っていただいた事、など嬉しそうに話している子ども達です。

園児保護者Tさん

先日は子ども達の為に御指導いただき、ありがとうございました。

先生方の気持は暗やみの中に差し込む一筋の光だったのではないでしょうか。そんな光が沢山注ぎ込まれ、子ども達が笑顔になってくれれば嬉しいと思います。先の見えない混沌とした状況におかれている私達は、何を目的に生きて行ったら良いのかさえもわかりません。放射能に怯え乍らも、毎日を精一杯生きているつもりです。暖かくやわらかく寄り添っていただきたいと思います。また機会がありましたら是非企画して下さい。

子どもたちからの便り

熊坂 琢生

ぼくは始めは絵ってにがてでしたけどみんなで書いてはじめて絵って楽しいと思いました。それにみんなとひとりでは楽しさがちがいました。最高の「ゆめおい」でした。原発に負けずにがんばっていきます。

斉藤 大祐

この前は絵のかきかたや色のぬりかたを教えてくれてありがとうございました。

二科てんの馬の絵をテレビで見たらすごくうつっていました。ぼくは絵をかくのがすごくすきになりました。

只野 悠

わたしたちの絵が国立新美術館にかざってあり、よく目だってよかったです。わたしたちのかいた絵の所にいっぱいの人が集まっていてうれしかったです。

菅野 玲奈

上真野小は、ショベルカーであなを二mほど近くまであけて校庭の土をとってうめました。だから線量が下がったので外であそべるようになると思います。

わたしは絵をかいて馬に乗せたけど空にとんでいるようなかんじでした。おしえていただいてうれしかったです。

渡部 絢斗

井戸川 明詩

私たちの絵をかざっていただきありがとうございます。私は絵がかんせいしたとき、とてもうれしかったです。それにあんなに大きい紙にかいたりはったりしたのは、生まれてはじめてでした。本当にありがとうございました。

長谷川 冬美

わたしは九月三日二科てんを見にお父さんとお母さんと妹といき、妹のしどうをしてくれた山中先生を見ました。

二科てんではとってもすごい絵があってびっくりしました。

長谷川 冬美

絵画教室参加者
松室重親　川内　悟
中島敏明　山中宣明
塙　珠世　横前秀幸
須田美紀子

私の故郷は福島県南相馬市であるが、三月十一日の東日本大震災による未曾有の被害は、原発事故をも伴い地元に大混乱を引き起こしている。

五感で感じることのできない放射能は、未だ事態の収束をはかることはできない。そんな中、二科会の仲間が南相馬市を支援して頂いた事は大変嬉しく思います。ありがとうございました。

中島 敏明

訃報

評議員 伊藤 髙義氏 逝去す

評議員　**伊藤 髙義**

平成二十三年六月二十八日没　八十五歳

ご遺族　伊藤　創
〒四八〇－一一〇一
愛知県愛知郡長久手町大字熊張字東田二〇四四

遺作
マリアッチの灯は消えず　S100
伊藤 髙義

伊藤 髙義氏略歴

一九五三年　二科展初入選
一九六六年　会友推挙
一九八〇年　会友賞
一九八一年　会員推挙
一九八九年　努力賞
一九九六年　評議員就任

メキシコの事なら　メキシコにぞっこん惚れぬいた男のことを言う。

まさに伊藤髙義君こそ、ぴったりのメキシコ一辺倒のメキシコ野郎である、少なくとも作品の隅々からその匂いが伝わってくる……。

これは今年三月に九十六才で逝去された安藤幹衛先生の言葉である。

北川・安藤両先生の後をついでメキシコ取材旅行を、毎年、毎年と回を重ねて何回行ったか解らない位愛した最後の画家である。

旅行中眼につくものは、すぐ筆をとって、ありあわせの紙に描いていた行動的な画家である。戦後間もない昭和二十八年頃に二科展に入選し今日まで二科会をこよなく愛した律儀な性格。で…胃癌の手術退院後も、手抜き休業をとって自己本位の世界に満足する事もなく、本年五月の理事監事評議員会には手弁当で出席し、一度に少量の食事しか摂れない身を押して参加していた真面目な、会思いの彼、いつも傍にいて相談できた男、ときにはライバルと呼ばれた彼を思うと無性に悲しい……。

数知れない多くの絵描きがメキシコへ案内されてメキシコブームを作り、メキシコ野郎と呼ばれ、アトリエをメキシコ専門の美術館にした男、木版画をこよなく愛し死の直前まで仕事をして版画集を出版、皆さんに最後の別れの言葉をいって去った男に心から御冥福をお祈りいたします。

悲しい……

合掌

杉浦 正美

広報だより

八月三十一日二科展会場入口で四部門代表によるテープカットが行われ第96回二科展は幕を開けました。

●恒例の【チャリティー色紙展】は、例年より多くの色紙の寄贈を頂き、又本年はデザイン部からのご協力も頂きお陰様を持ちまして此れまでを上回る売上げを果たすことが出来ました。売上げ金は生方・川内両氏がNHKを訪ずれNHK厚生文化事業団に五十万・東日本大震災の被災地へ十万円を二科会の援助活動として寄付をさせて頂きました。

●金曜日の【ミニコンサート】では、チェルノブイリ原発事故の体験者、ウクライナ出身の歌姫ナターシャさんの心に染み入る音楽とスピーチが披露され、年々増える来場者と共に会場内は穏やかな空気に包まれる一時となりました。

●今年二回目の【二科展ツアー】は予め申し込みを受け付け、対象者のニーズに対応するきめ細かい絵画と彫刻の会場ガイドを行っています。本年は京都造形大学通信講座の受講生、茨城のカルチャースクール生徒さん、共立女子大学アカデミー講座の受講生、駒場東邦高校美術部の生徒さんらが参加され、又来年も是非二科展に足を運びたい等の感想が寄せられ、今後もリピーターが増えるよう努力したいと思います。

●新企画【作家のアトリエ訪問】、今年八名の会員の方のアトリエ取材をお引き受け頂き、写真パネルと作家のコメントを作成し休憩室に展示しました。一般来場者に向けて作品を身近に鑑賞する為の企画展開は、多くの方が興味深く鑑賞され好評の運びとなりました。又我々にとりましても作品が生み出される空間を垣間見る魅力は作者と作品を密接に感じる事が出来、今後も継続をして行きたく思いますのでご協力の程宜しくお願い申し上げます。

広報部では今後も二科会の魅力を広く告知し、来場者及び新規出品者の獲得に努力する所存ですので、皆様のご指導ご協力をどうぞ宜しくお願い申し上げます。

広報部　加覧 裕子

「作家のアトリエ訪問」展示

事務局だより

天災を乗り越えて

第96回二科展は大震災の影響で出品点数や入場者の大幅減が懸念されていましたが、被災地の出品者を含めてほぼ昨年通りの数の熱意溢れる作品が搬入されました。

また展覧会前半には台風が襲来し開館も危ぶまれる日もあり減少したものの、約九万人の入場者を迎え盛会裡に終了することができました。二科会の伝統の力を再認識し、会員・関係者の皆様のご尽力に感謝の念を強くしました。

具体的な数字は下記の表の通りご報告申しあげます。（表1・2・3参照）

今回の二科ニュースでご報告の通り四部門が知恵と力を合わせて様々な義援活動がいち早く実行されました。

東日本大震災からの復興に向けては芸術団体として、あるいは会員一人一人が表現者として何ができるかを問われた年でした。

また会場でのギャラリートーク等でも作者のお話を伺うと大小の差はあれ、震災の影響が根底に現われていたり、表現している作品が多く、震災が与えた影響の大きさを物語っていました。

義援活動に携わった義援活動委員会・広報委員やチャリティー色紙展等に御協力下さった先生方に事務局からも厚く御礼申し上げます。

また展示や授賞式のご報告にもあるように、審査内規を改善しつつ、若手育成の観点から審査を実施し、次世代につながる息吹が強く感じられました。同時に長年二科展に発表し続けている出品者にとっても、磁力のある発表の場であり続けるような審査であることも重要な課題と思われます。

大臣賞審査においては委嘱審査員として美術評論家の林紀一郎・南嶌宏両先生にお願いし、討議と挙手による厳正・中立な審査をしていただきました。

今後公益法人認定や来年度の役員改選・春季展再開に向けて微力ながら遂行して参りますので、会員の皆様のご指導、御協力を事務局一同よりよろしくお願い申し上げます。

事務局長　山中 宣明

表1

入場者	単位(人)	昨年比
一般当日	4014	
前売り券入場	5244	
高校・大学	407	218 減
メトロコマース	1190	330 減
チケットぴあ	85	14 減
団体割引	65	
企画割引	254	
チラシ割引	629	
有料入場者小計	11888	1921 増
無料入場者	76746	14076 減
入場者合計	88634	12155 減

表2

搬入点数	単位(点)	昨年比
絵画・一般	2946	61 点減
絵画・会友	1005	8 点増
彫刻・一般	69	19 点減
彫刻・会友	44	4 点増
合計	4064	68 点減

表3

展示(遺作含む)	人数	点数
絵画・一般	677	682
絵画・会友	251	289
絵画・会員(遺作含む)	148	148
彫刻・一般	65	69
彫刻・会友	44	44
彫刻・会員(遺作含む)	53	64
展示合計	1238	1296

今後の予定

春季展
平成二十四年四月十七日～四月二十三日
於都美術館

第97回二科展
平成二十四年九月五日～九月十七日
於国立新美術館

編集後記

来春から、実験、挑戦の場でもある春季二科展が再開されます。

上野の山が満開の桜でつつまれた新しい都美術館でお会い出来る事を楽しみにしております。

二科ニュースで使用するカットを会員の方々にお願いいたします。事務所までお送り下さい。

二科ニュースのメンバーが大幅に変わります。今までの方々には、お疲れ様でした、新メンバーの方々、よろしくお願いします。

カット　会員 島田 紘一呂

編集委員
委員長(彫)島田 紘一呂
委　員(絵)倉橋　寛
〃　〃　戸狩　公久
〃　〃　浅賀　昌子
〃　〃　岩田　博
〃　〃(彫)安田　明長
写真記録(絵)本間 千恵子
〃(彫)阿部　昌義

平成二十三年十月二十七日発行
社団法人 二科会
東京都新宿区新宿四―三―十五
レイフラット新宿　五〇一号室
電話　〇三(三三五四)六六四六
〒一六〇―〇〇二二